



Title	ワンウェイ「コンシューマ・パッケージ」の時代 : 1960-1995
Author(s)	向井, 吾一
Citation	デザイン理論. 1999, 38, p. 78-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53245
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ワンウェイ「コンシューマ・パッケージ」の時代——1960—1995

向井吾一／京都市立芸術大学

1. はじめに——1970年の状況

1970年（S. 45）は大阪万博の年で、経済成長のハイウェイをトップギアでアクセル踏み込んだ時でした。個人的にも集団組織的にも“企業社会”の中で、富（利益）の形成を優先させ“豊かな社会”を築くことを目指しました。20世紀後半の高度成長社会の有様を、パッケージという消費材を通して見る試みです——日本の包装が産業として体系化された1962年（S. 35）に4,500億円であった産業規模は1992年（H. 4）には6兆6,000億に拡大しました。包装が中身商品に付随するだけの存在から、パッケージングによって商品として流通し、消費動向や生活使用への効用性を問う展開とともに存在領域を飛躍させると同時に消費された包材が廃棄物公害としてコンバインされる。今日までつながる問題が出揃ったのが1970年の状況でもあったといえます。先進国の経済活動が資源消費や廃棄物問題といった地球環境の保全に負の影響を与える規模に到り、地球が有限である視野から包装も新たな秩序を作り出す時代です。

パッケージは身近に溢れて当り前にありすぎており、また産業としても他領域と複雑に関係していて、その全体像は見えにくいものです。今回は「コンシューマ・パッケージ」と「価値観・ライフスタイルの変化」を演出する「アドバタイジング（広告）」の送り手と受け手の両面から、量産化の媒体としてのパッケージを振り返って見ることにします。

2. コンシューマ・パッケージと、食品

●パッケージ商品とは、パッケージングする

ことで商品となるもの。特に飲料をはじめ食品の多くが該当します。米俵・麻袋や桜餅・笹の葉寿し、樽酒、腸詰ソーセージなどから陶土器、ガラス器、漆器、木箱、風呂敷などは古来より物を入れたり包んだりする用具でした。金属は特にナポレオンの従軍戦役での缶詰めの登用から、調理済食品の保存携帯容器として、厚紙やプラスチックとともに現在のパッケージング概念を作り上げ、大量に生産され消費されてきました。また水甕の昔から今日の牛乳パックまで液体容器は包装の主題でした。貯蔵運搬に用いられ、密封性能と易開封性が要求される。紙器やフィルム包装のシール加工、瓶のキャップ、アルミ缶のフルトップなどです。こうした品質保持と使い手にやさしい機能が附与された個包装を「コンシューマ・パッケージ」とも言います。

●プラスチック系素材の開発

金属缶、ガラス容器、紙器にプラスチック系が包装素材としてシェアを占めて行きます。プラスチックフィルムのシール加工したパウチ（軟包装）や樹脂成型の容器はコンシューマ・パッケージが要請する機能に適した特性があり、スーパーマーケットの展開とともに1970年代、急速に包装産業を拡大させます——中空成型品、射出成型品、シート成型品。バッグ・イン・ボックス、バッグ・イン・カートン。ラミネートチューブ。インサートインジェクション複合容器、等の開発。「台所に立ってぐると見回すと、なんとプラスチック製品の多くなったことか。なにからなにまで生きも

の以外はみんなプラスチックに取って代わってくれようという勢いだった。そろそろプラスチック勢もいいものは残し困るものは引きとり願う時期である。よいほうのひとつがバケツ。困るほうの一つがこのざるである」(花森安治「道具再見」1972)

- 1970年における食品事情と人口問題。'70年の人口は36億前後で、人口増加率はアメリカ2.6%アジア2.2%、日本は西欧並に1.8%で、このまま2%の増加を続けると2000年台に70億人に達し、地球の人口分布から食糧の余剰地域と不足地域の差が非常に大きくなる。2000年台には1億5千万~2億トンの食糧不足となる。ローマクラブの'71年刊のレポート「成長の限界」によると、人口70億としたら2010年には食糧はギリギリになる。生産を2倍3倍にあげても2060年には完全に食糧は不足。鉱物資源も現在の調子でいくと数十年の単位でしかなく、また地球上の汚染(炭酸ガス、廃棄熱、水質汚濁)は2050年に限界に達し、地球破壊が始まるということです。飽食の一方で飢餓が生じて行く。日本の食糧生産のための耕地は国土の15%、約600万ヘクタール。半分水田。水産物畜産物からのカロリーをあわせ、日本人1年間の生活に必要なカロリーは150兆カロリー。日本で生産されるのは53兆カロリーで耕地面積から計算すると35%にあたる。小麦の85%が輸入で、大豆はアメリカ、中国から96%、砂糖75%等。そば屋にいったら天ぷらそばを注文したらエビをはじめ殆んど輸入で、水と刻んだネギだけが国産。1000億産業の冷凍食品でもギョーザやシューマイの原料はすべて輸入で、ただそこにあるのは日本の加工技術、流通技術、包装技術だけと言えます。